なまぬるい風があたる日

みさと（著）

なまぬるい風があたる日

みさと

昔々のことです。ある晴れた春の丘に三羽の王子が生まれました。二ワトリの子供でしたから一番上は二ワ、二番目はトリ、そして三番目はポラコンと名付けられました。

三羽はともに、同じミミズを食べ、同じ草の寝床に眠り、たくましく成長していきました。羽は、しっとり白く、輝いていました。

ある日のことです。年頃となった三羽の息子を見た母の二ワトリは、息子たちをそばへ呼んでこう言いました。

「おまえたちは、もう十分に成長した。そろそろ、お嫁さんをもらってもいい年頃だよ。新しい家族を作って、幸せに暮らしなさい。さて、誰か好きになった子はいないかい？名前をゆってみなさい。」

三羽の息子たちは、ココー、ココー、と、耳をつんざくような大きな声で、叫びました。

びっくりしたことに、三羽とも同じ女性の名前を叫んでいました。三羽は、顔を見合わせました。

「こまったね、おまえたち、いとこのババロアニ世が好きなのかい？　んーどうしようかねえ、ほんとにこまったよ。」

お母さんは、天を見上げました。

次の日です。

お母さんは、息子の二ワと、トリ、そしてポラコンを連れて、四つ丘をこえました。

こえたところには、大きな納屋がたちはだかり、大きな影を作っていました。そこが、いとこのババロアの家でした。

大きな広間に通されたところで、前をじっと見ていると、ババロア家の二ワトリ国王がくくっ、くくっ、と鳴きながら現れました。

ポラコンの母は、それに応えてくくっと鳴くと、ふかくおじぎをしました。

「おはようございます。国王様、早朝からむ

かえいれてくださりありがとうございます。じつは、悩み事がありまして、相談にのっていただきたく、まいったしだいでございます。」

「ふむ、悩みか、ゆってみい。」

国王は、赤いマントをひらりと広げて椅子に腰かけました。

ポラコンの母は、三人の息子がババロア二世を嫁にもらいたいと言っていることを、伝えました。

「ふーむ。」

国王は、あごを左手でつまみ、しばらく考えていました。

「よし、ひらめいたぞ。わが娘を嫁に迎えたいのならば、そなたらの一番ざんしんと思われるものを贈り物としてもってこられよ。その中で、姫が一番と思ったものをもってきたら、その時は娘をくれてやろう。」

「承知しました。」

二ワとトラとポラコンは、大きな声で鳴き

ました。

三羽は、自分たちの城に帰ると、さっそく荷造りの準備をしました。ふろしきにイモムシやらミミズやらの干したのをいれて、両はしをくるくるとしぼって首で結びました。体の前に、水筒がななめにかかっているかのようないでたちです。

簡単ないでたちですが、二ワトリですから長旅にたいして道具はいりません。

二ワとトラとポラコンは、その日の夕方、次の日の日の出をまたずに旅に出ました。

しばらく三羽は、同じ丘をともに歩いていました。日も暮れて、天井に星の屋根ができた時、干しミミズを二匹食べ、すこし寝ました。

三時頃、ポラコンが目を覚ますと、二ワとトラも起きていました。三羽は、またずんずんと歩きつづけました。

お昼頃になると、三本のわかれ道に出会いました。港はこちら、「中国行き」「イギリス行き」「インド行き」という看板がそれぞれ立っています。

「にいさん、おれインドに行くよ。」

とすえっこのポラコン。

「にいさん、僕は中国に行くよ。」

と二番目のトリ。

「じゃあ、けんかせずに道をすすめるな、僕はイギリスへ行くよ。」

そしてそれぞれ、歩いていったのでした。

一ヶ月後のこと、ポラコンは海の旅をおえようやくインドへたどりつきました。インドは、想像していたよりはるかに暑く、売られていた黒い布をかぶらなければ、すぐに焼き鳥に変身ができそうでした。

「さて、どうしよう。ババロア様に何を贈ったらいいか、海の上でも、色々と悩んではいたが、なかなか考えがまとまらない。」

ポラコンはとりあえずにぎわう市場をのぞいてみました。歩いてはじっと足を止め、歩いてはじっと足を止め、そのくりかえしを、ポラコンは五時間も続けました。そしてとうとうくたくたに疲れてしまいました。

「ああ、疲れた。もう足が動かない。」

ポラコンは、建物と建物のすきまに座りこみました。しばらく休むには、ちょうどよい冷たさです。

「にいさん、このじゅうたん買わないか？」

突然、となりのセキショクヤケイがひそひそ声でポラコンの耳にささやきました。金の羽をもつ、とても体格のよいおじさんでした。

「普通のじゅうたんなら買わないよ。」

ポラコンは疲れた声で言いました。

「ははははっ、普通のじゅうたんではない。おどろくなよ、これはあの有名な空飛ぶじゅうたんさ。にいさんがいらないならほかのやつに売るさ、どうだ。三百万、格安だろ？」

ポラコンはごくりとつばを飲み込みました。

空飛ぶじゅうたん、本気で言っているのでしょうか、それとも冗談でしょうか。

「使い方は？」

くいついたとばかり、セキショクヤケイはにたり。

「月の光にあてると、むくむくとうごきだす。あとはいきさきを声に出して伝えるとつれていってくれる。」

「じゃあ今は、ほんとに飛べるかどうか確かめることができないってことか。そんなものに大金など渡せん。」

「じゃあいいさ、ほかのやつを探すよ。」

セキショクヤケイはおもたい腰を上げて歩いて行ってしまいました。

その数時間後、夜がやってきました。

ポラコンは、大きな岩のとん先に腰をかけ、街を見ていました。いがいにも夜はきょくたんに冷えました。寒いので、少し厚地の布を肩にかけました。

ふとみると、昼間のおじさんが背をむけて座っていました。じゅうたんがまるめてそばにおいてあります。もしかして二ワトリちがいかもしれません。

近くに行ってよく顔を見てみると、それはやっぱり昼間のセキショクヤケイでした。

「売れたか？あのときのじゅうたんは。」

セキショクヤケイはちからなく首をふりました。

「誰も信じてくれない、価格も高いって。」

ポラコンは長いため息をつくと、おじさんの肩に手を置き、広い空を見上げて言いました。

「月が見える、おいちゃんのゆうことがほんとなら、三百万じゃものたりない。このルビーをやるよ。三億はする。一生遊んで暮らせるぞ。」

ポラコンは、首にかけてあった大きな宝石をセキショクヤケイにみせました。みるまにおじさんの顔がほころんでいきます。

「ほんとにきまってるさ、オレを誰だと思ってるんだ、商人にうそはない。」

「さあじゅうたん、ふんわりふんわりういてごらん。」

じゅうたんは、ふんわりもちあがり、くるくると回転してまた地面へ落ちました。

ポラコンは、あいた口がふさがりません。

「おどろいたよ、おじさん。おれ、ほんとにおどろいたよ。すげーな。」

ポラコンは、ルビーをセキショクヤケイにわたすと、じゅうたんにとびのって

「ちょっと、ういてみてくれ。」

とさけびました。

ふわふわとやっぱりうきました。

「やった、おじさん。ほんとにういた。これなら贈りものにちょうどいい。きっとおひめさん喜んでくれるぞ。やっほー。」

ポラコンは手をふって、おじさんとわかれました。このまま、空の旅をつづけ、日本をめざしました。早く届けに行きたかったので

すが、風圧に顔がゆがみそうだったので、小舟で進んでいるくらいのスピードでかまわないよ。とじゅうたんにいいました。

そのため、その上で、のんびりと千しミミズをかじることができました。ポラコンは今、とても幸せでした。

一ヶ月後、ポラコンは日本へ着きました。あの、兄弟とわかれた三本道が下に見えました。小さなかげもふたつみえました。あっ、兄さんたちかも、おい、下に降りていってくれ、ポラコンはじゅうたんに声をかけました。

下に降りると、やはりあのなつかしい顔ぶれでした。この二カ月の短期間できゅうに大人っぽくなったような三羽でありました。

「トリにいさんどうだった？僕は空飛ぶじゅうたんを手に入れたよ。」

「そうか、さすがだな、ポラコン。でも僕も負けてはいないよ、このりっぱな象牙をのぞいてごらん、望むものすべてが見えるんだ。

きれいな景色がいつでも見れる。きっと姫様喜ぶぞ。」

「へー、それはすごい。ニワ兄さんは？」

「僕はこの赤いりんごさ。」

「りんご？」

「うん、一口かじればどんなやまいも治ってしまう。ひめさまがこまったときにつかってほしい。」

「うん、きっと喜ぶね、ひめさま。あっ、じゃあトリにいさん、ちょっとそれのぞかせて、お城のようすを見てみたいな。」

「あいいよ。」

ポラコンは、細い象牙を手でつつんでもちました。片目をつむってのぞくとそこにはあのババロア城が、うつっています。

「わあ、すごい、よくうつってるよ、ん？あれはなんだ？」

よくみると、白衣を着た、医者らしき人が足早に城の中へ入っていきます。

「何かようすが変だ、医者が走り回ってい

る。」

三羽の王子は、顔を見合わせました。ここは、協力をしなくてはなりません。

三羽はじゅうたんに飛び乗ると、いちもくさんにババロア城を目指します。

ババロア城にものの数分でついたポラコンたちは姫の部屋の外にあるベランダに降り立ちました。窓に鍵がかかっていたので、三羽は顔をおしつけて中をのぞきました。

病にたおれているのは国王でもしんせきの誰かでもなく、やはりあのお姫様でした。眠っているお姫様に、聴診器をあてているお医者様の姿がありました。

三羽はどんどんどんとまどをこぶしでたたきました。あけてくれ、あけてくれとコケコケ叫んでいます。

看護婦が、窓を開けてくれました。三羽は転がるように部屋の中へ入りました。二ワがりんごをお姫様にかじらせました。三羽がはらはらと見守る中、お姫様は荒い息をやめ、

いったん目を開けました。そしてまた目を閉じると、やすらかな寝息をたててお眠りになりました。青白いカサカサとした羽が、あのいつものようなつやつやとした白い羽に戻っています。よかった、よかった、と手をたたいて喜ぶ三羽の王子につられて、目をまるくしていた看護婦とお医者様も、よかったよかったとながれる涙をぬぐいました。

その晩、三羽の王子たちは、国王とともに食事をしました。ミミズのほかほかスープと、イモムシのステーキが出ました。三羽の王子たちはあつあつのゆげがたつ料理を久しぶりに食べました。

「さて、こまったな、お前たちの贈り物、どれもほんとうにすばらしかった。姫がああやって元気になったのも二つのりんごがあればこそで、トリの象牙がなかったら、急いで帰ってくることもなく、姫は今日死んでいただろう。ポラコンのじゅうたんがなければ、今

この時間に、ともに食事をすることもなかった。さあ、こまった、どうしよう。誰を王子としてむかえようか。」

国王はみけんにしわをよせると、さあこまったと、そこを手でつまみました。

しばらくして、紅茶とカブトムシの幼虫ケーキが出されました。国王は、そのケーキをフォークですくって口に入れ、しばらくかんで飲み込みました。そして紅茶をすすりました。

「あっ、ひらめいた。矢をどこまで飛ばせるか、それで一番遠くまで飛ばせたものが勝ち。どうじゃ。」

「いいと思います。国王様。」

三羽は声をそろえて鳴きました。でも内心は、これであっというまに勝負が決まってしまうのだなと、心寂しく感じていました。

次の日の朝です。三羽は丘の上に立ち、笛の合図で矢をはなちました。ぴゅーーーーー、

三本の矢は、かなり遠くまで飛びました。バロア家の家臣たちが、矢を見失わないようにとひっしにそれを追いかけます。

はじめにみつけたのはトリの矢でした。そして、もうしばらく歩いたところで、二ワの矢をみつけました。でもポラコンの矢はどこを探してもみつかりません。池に落ちたのかもしれません。木に刺さっているのか、川がもっていったのかもしれません。

結局、日が暮れるまで探しましたがポラコンの矢はありませんでした。それで勝者は必然的に二ワになりました。

トリは、中国がよほど気に入ったらしく、武道家として修行をしにいくといってでていきました。

二週間後、二ワとババロア嬢の結婚式があげられました。ポラコンも一緒に祝いました。その時、花嫁が投げたブーケ・トスをポラコンは、うけとってしまいました。

きれいな白い花束でした。

おれにも、新しい恋がやってくるのかしら？　小池のはしに座ったポラコンは、花束の匂いをかぎました。なまぬるい、あたたかな風が顔をなでていきました。

ぽちゃっ、近くで水音がしました。

みると、そこには大きな透明の羽をもつ、妖精が座っていました。ひざから下は水の中に入れていますが、彼女が足をもちあげるたびに水はふくれあがり、ぽちゃっと音をたてていました。妖精はなんだかいとおしそうに長い矢をながめ、日にかざして、青く色が変わるほさきをみていました。それは、あの日ポラコンがはなった矢に、まちがいはありませんでした。

ポラコンは、彼女にひとめぼれし、やがて、ゆっくりと恋におちたのでした。

なまぬるい風があたる日

http://p.booklog.jp/book/70761

著者：misato77
著者プロフィール：http://p.booklog.jp/users/misato77/profile

感想はこちらのコメントへ
http://p.booklog.jp/book/70761

ブクログ本棚へ入れる
http://booklog.jp/item/3/70761

電子書籍プラットフォーム：ブクログのパブー（http://p.booklog.jp/）
運営会社：株式会社ブクログ